



はるさきめへび

Harasakimebi

性名誠



はるさきのへび

一九九四年五月二五日 第一刷発行
一九九四年七月九日 第四刷発行

著者 椎名 誠しいな まこと

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一五〇

編集部 (〇三) 三三三〇一六一〇〇
電話 販売部 (〇三) 三三三〇一六三九三

制作部 (〇三) 三三三〇一六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社
検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1994 M.SHIINA

Printed in Japan ISBN4-08-774068-4 C0093

目次

階段の上の海 5

海ちゃん、おはよう 137

娘と私 209

あとがき 331

装画 沢野ひとし

装丁 菊地信義

はるさきのへび

階段の上の海

その一

朝おきて窓の外を見ると、海が見える家に住む——というのが秘かにずっと抱いている夢だ。サラリーマンをしている頃は、単なるユメタワゴトの夢であった。そうしたい、と思っても現実的にはできるわけではないのだった。

勤め先のある銀座から、海も山も川もない東京の西の町に帰る毎日だった。

会社は銀座八丁目にあつて、新橋の側にすこし歩くと浜離宮があつた。

浜離宮は、たいして面白くもない池と樹々が繁っているだけの有料の公園なので、いつもあまり人は入っていない。

会社から脱けだして、一人で時おりそこに行くことがあつた。浜離宮は海沿いにあるので、樹々の切れ間の一箇所から、東京湾のカケラのような運河を眺めることができた。

底にへドロのたまつた汚い水面であつたが、樹々の隙間から眺めるぶんには、それでもたし

かに「海の気配」の片鱗はあった。

勤め先から歩いて十分もしないところで海の気配に触れられる、ということがぼくには、秘かなよろこびだった。

もうひとつ、会社の近くに海を眺められる場所があった。

それはばかばかしいほどの近くで、ぼくの会社の入っているビルの隣だった。会社は裏通りに入口があったが、隣のビルは一階に専門店が入っているので、裏通りには従業員入口しかなかった。その入口の横に災害避難用の階段があって、ある日ぼくは唐突にそこを上っていった。思ったとおり首都高速一号線のくねって流れるコンクリートの川のようなそのむこうに、白く光る東京湾が見えた。

ぼくは嬉しくなり、よく一人でそこに上っては鉄柵に寄りかかってながいこと陽に光る遠くの海を眺めたりしていた。

避難階段は十階まで続いており、塔屋に上るところで進入止めの一メートルほどのフェンスがあった。

そこは二メートル四方ぐらいの空中の踊り場のようになっており、風が強い時は少々おそろしかったが、銀座のまん中で海が見える、という魅力には抗しがたかった。

浜離宮から眺める海と、避難階段から眺める海には一長一短があって、眺望の素晴しさは階段の上が優っていたが、そこからだと海の気配を感じるにはさすがに遠く、そのところが浜

離宮の樹々の隙間の海に負けていた。

——ぼくがそんなふうに勤め人になっても海の気配にこだわるのは、たぶん子供の頃に海べりで育った、ということに単純に根ざしているのだろう。

自分の生きている空間のどこかに、常に海の気配がないと、なんだかぼくは時おり精神的に窒息してしまいそうだった。

結婚して住むことになったK市は、雑木林と桑畑と芝草の畑があちこちにあった。千葉の海べりの汐くさい海の雑草ばかり見ていたぼくは、芝草を一面に植えてやがてそれを座布団のようになくまかく切って売りに出す、ということを知り、ひどく驚いた。

点在する雑木林が嬉しかった。雑木林の中はひんやりとして、そこに吹いている風はたしかに武蔵野の風だなあ、と思った。

静かない町であった。

住んでいる人々は海べりの町の人々よりもずっと都会的でしゃれていて、日曜日の昼下がりなど散歩の途中で聞こえてくるラジオの音楽も、海べりの町に流れているのとはまるっきり違うもののように思えた。妻とその母親の三人で暮らしている家も、近くに雑木林があり、風が通り抜けていくと、その小さな雑木林全体が風の音をたててわらわら身をゆすり、その林の先の住宅地からは時おりピアノの練習曲なども聞こえてきた。

妻は都心の建築設計会社に勤めており、明るく献身的で、いたって生真面目な生き方をして

いた。義母は戦争で夫を失ったあと、意志と思想のはっきりした教育者として多忙な日常を送っていた。

三人が仕事をしていたので、毎日の生活はひどく慌^{あわただ}しかったが、日曜日になると、ぼくも妻も仕事から完全に逃れて、のんびり一日を過ごす、ということをし、なんとはなしのお互いのトリキメのようにしていた。

晴れた日曜日の午後は近くへ散歩に出る、というのが、そのトリキメの中で唯一目的を持った行動だった。

家の近くに玉川上水が流れていて、その兩岸はずっと川に沿って樹々がおい繁っており、日曜の午後の散歩には丁度いい場所だった。

だから厳密にいうと、K市には山も海もなかったが、川だけは流れていたのだ。

けれどぼくはそのいかにも人工的な直線的な速い流れを、純粹には川とは思っていなかった。千葉の海べりの町を流れていた川はもつとのつたりとだらしなく、薄汚れていいかげんに田や畑の間を流れていた。

「魚はたぶんいないと思う……」

と、妻がぼくの質問にこたえて言った時、

「ああ、それじゃあやっぱりこれは川ではないな」と即座に思ったのだが、妻を気づかって口には出さなかった。

玉川上水の流れは滔々^{とうとう}として、揺るぎなく、水面のあちこちで黒い瘤^{こぶ}のようなものがくねって踊り、また消えていくのが見えた。細い水路をいちどきに大量の水が流れていくので、地形によってそんな水面の瘤のようなものができるようであった。

そこから十キロほど下ったあたりでその昔、太宰治が入水自殺した、ということ聞いた時、なるほどこのくらい速い流れだったら、助からないかもしれないな、と思った。

散歩は上水の流れに沿ってその日の気分を上流へ向ったり下流へ歩いたりした。

上流に向って歩いていくと、小さな堰^{せき}があり、たいていそこが最初の休憩場所になった。

川の流れに沿って歩いていき、遠くに激しい水のとどろきが聞こえる時の、なんともいえない気持の高ぶりが、わけを知っているとはいえず、いつも新鮮で、知らず知らずのうちに足が早くなった。

そこは堰を中心にして川岸が左右にいくらか膨らんでおり、その分頭上を覆う樹々も多くなっていた。

堰の落差はたかだか一メートルくらいのものであったが、水量が多く流れも速いので、滔々と落ちる水音が見かけよりも凄^{すさま}じく、その周囲だけは安全のために鉄の柵が設けられていた。

思えばその頃、玉川上水の川岸に柵があるのはわずかに橋の近くや堰の周囲あたりだけで、左右の川岸のどこも柵などで防護されていなかった。

現在はまるで珍らしい動物でも囲うようにして玉川上水の上から下まで丈の高いフェンスで

兩岸をびっしりどこまでも張りつめ、その下をすっかり涸れて水深二、三十センチの水がうろ
うろ困ったように流れているだけのさびしい風景になっている。

思えばそんなに随分昔のことでもないのに、その頃はあの激しい流れに無粋な柵など一切し
てなくて、しかし誰も流れに落ちたりなどしなかったのだ。

堰を斜めから眺められる土手の上が、ぼくと妻のひと休みする場所だった。

たかだか二、三時間の散歩だったが、妻はいつもテルモスにたんぽぽのコーヒーを入れて持
ってきていた。

堰から落ちる水はたいてい黒く重く光っており、何かごわごわといつも腹の底から怒ってで
もいるように、揺るぎない自信に満ちた力強さであたりの空気をふるわせていた。

はじめてこの堰を見た時、ぼくは家からほんのすこし歩いただけで、どこか観光地のような
気配のするところへ来てしまう、ということに驚き、これはいいところへ住むことになったも
のだ、とよろこんだ。

妻は土手のいたるところに密集している草花が気になり、ひと休みする間もなく忙しくあち
こちうろつき回り、沢山の野草をつんできた。

「あ、あそこにホタルブクロがあった」

とか、

「あれはキツネノカミソリだ！」

とか、その季節の新しい花を見つけたたびに子供のようによろこんでいた。

妻はじつにおびただしい数の草花の名前を知っていた。

「ノカンゾウの葉はたべられるんだよ、おいしいんだよ」

と、妻は目玉をぐるぐる回しながら、もうその顔を見ているだけでたしかにうまそうに、そのことをおしえてくれた。

ぼくはたいして花には興味はなかったが、おいしく食べられる花や葉と聞くと、時おり出かけている海や山でのキャンプ料理のために積極的^{おほ}に聞いて憶えようとした。

妻はそうやって野に出るとどんどん子供のようになり、岸から川面近くまですばしっこい身のこなしで動き回るので、ぼくはあまりのんびり寝そべってばかりいることはできなかった。

もし足をすべらせて上水の速い流れに落ちてしまったら大変だったから、いつでも水の中に飛びこめるようにしておかねばならなかった。

その堰をこえてさらに三十分ほど上流に向うと、一面の麦の畑が広がり、ところどころは雑草の原っぱだった。

散歩はたいいていその原っぱのあたりまでで、あとは時間をかけて畑の間の小道をゆっくり帰ってくるのだった。

下流は歩いていくにつれて上流よりも人家が多くなってくるので、時間によってはかえってくたびれてしまう、というようなことがあった。

途中に水車をぐるぐる回している喫茶店があつて、下流に行く時はテルモスを持っていかないので、そこでいささか酸味の強い紅茶をのんだ。

喫茶店の主人は趣味で油絵をやっているとかで、店の中にはアブストラクトのなんだかあまり意図のよくわからない小さな絵があちこちたてかけてあつて、その描き手の本人がいつも縦縞じまの入ったエプロンをつけて、なんだか悲しげに見える犬のような眼でコーヒー茶碗などをきゆるきゆる拭いていることが多かった。

妻は店の横で回っている水車が、モーターで無理やりきしりきしりと回っているのを知って「なんの意味があるんだらう」と、その店に行くたびに首をかしげていた。

日曜日のたびのこうした近くへの散歩も前の年の初春から翌年の初夏の頃までで、その年、待望の夏がやってくる頃、ふいにとだえてしまった。

それは妻がそれまで勤めていた会社の仕事をやめ、義母が経営することになった保育園の仕事を手伝うようになり、のんびりできる時間がすっかりなくなってしまったからだった。

その頃時代は高度成長経済まっしぐらで、企業は経営規模を次々に拡大し、人は競って東京の郊外に自分の家を求めようとしていた。

経営規模を増す企業は人材を男女にひろく求め、郊外に新しい家を持とうとする人々はその購入費をこしらえるために、専業の主婦らが家からどんどん外に出ようとしている頃でもあつ